

アメリカを巡りて (I)

瀬木紀男

T. SEGI: My visit to America (I)

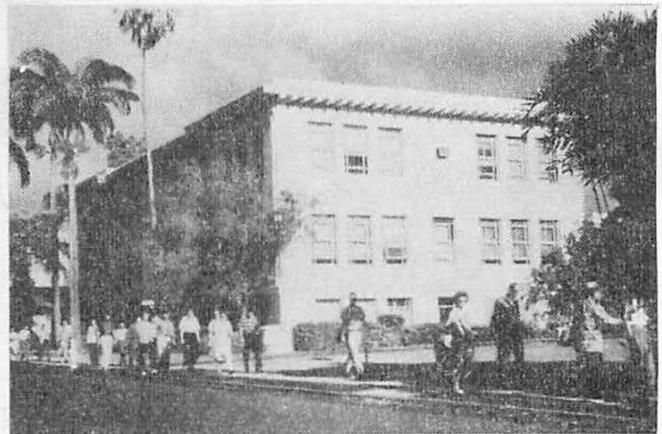
筆者はハワイにて昨夏開催された太平洋学術会議出席後、アメリカ各地の藻類学関係の大学、臨海実験所、水族館等を歴訪する機会を得たが、就中 *Gelidium*, *Polysiphonia* の Type specimen を精査し得たこと、夏季休暇中にも拘らず多数の各国藻類学者と会談し得た事等は幸であった。以下藻類学関係に重点をおいて順次経過報告する次第である。

(1) ハワイへ

羽田を日航機で昨年8月中旬飛び立ち、太平洋を一路東進ハワイに向った。途中ウエーキ島に立寄ったが、出発後僅か8時間余で早くもホノルルに到着した。空港で知人より大きなレイ2個を首にかけられ、檜山氏(東大)の案内で専用バスに乗りこみ、深夜の街を走ってワイキキのホテルに向った。着いてみると突然のホテル変更で面食ったが、兎に角別の瀟洒なホテルに落ち着いてほっとする。同室に市村氏(教育大)、又隣室には渡辺教授(お茶の水大)、永田教授(東大・南極探検隊長)がおられるので心強い。十年振りにみるワイキキには、何十階もある新しいホテルが続々と立並び、南国の椰子の下ムームー姿やビキニスタイルのアメリカ美人が歩いて絵の様に美しい。

開会に先立ち DOTY 氏の招待が8月20日夕方からあるので、折柄留学中の新崎氏に迎えられ、ホノルル市の丘の上にある同氏宅に向った。

出席者は ABBOTT (米), 新崎 (日), CHAPMAN (ニュージーランド), CHIU (中国), DAWSON (米), DOTY 夫妻 (米), HOLLENBERG (米), JIZZ (豪), MEÑEZ (比), NIELSEN (デンマーク), NORRIS (米), 瀬木 (日), WOMERSLEY (豪) 氏等多彩な顔振れであったが、東洋人も多いせいか一同坐って独特のハワイ料理をいただき、太平洋地域の藻類学研究について各国別に種



ハワイ大学植物学教室 Dean Hall と参会者

々懇談した。夜 11 時頃更けゆく南国の夜を惜しみつつ、ハワイらしく各自ターチ (道しるべの火) をたよりに帰路についた。

第 10 回太平洋学術会議は 8 月 21 日からいよいよハワイ大学で開会されたが、9 月 2 日以後は数日乃至 10 日間位に亘って 4 つの主な Field trip が専門別にハワイ諸島で行なわれた。この会議は 9 つの Section の下に 19 の Division があり、各 4 つの Reception と公開講演、2 つの Panel discussion があるという可成大きい国際会議である。出席者は二千余人、内日本からの参加者は百数十人に上った由である。猶次回は東京で開催される。

ハワイ大学へ Registration のため 8 月 21 日朝行く。大学の構内を歩いて



マツカーサー椰子に挿入された案内板

ていると本当に御伽話の国に来た様である。スプリンクラーがくるくる廻る芝生に包まれて白いビルが立並び、美しい椰子の下様々の服装をした各国人が歩いて夢の様なキャンパスを現出している。受付は一個所しかない為、何百人の参加者が延々長蛇の列を作っているが、誰一人愚痴を言わないのもさすがお国

柄である。この日夕方からは、米国務大臣主催のレセプションがワイキキの浜に面する芝生の上で行なわれ、和やかな一時を過した。終りに主催者と固く握手を交わして散会した。

藻類関係の研究発表は 8 月 22 日から 9 月 6 日迄 “Marine Productivity in the Pacific” (a series of Symposia) としてハワイ大学植物学教室 Dean Hall で行なわれたが、之は非常に広範囲にとり Division of Botany (Organizer: Dr. SMITH, Hawaii Counterpart: Dr. DOTY), Marine Biology and Fisheries, Oceanography に関係するものをも含めたものであるが、之を狭い



ワイキキにてのレセプション (左端は筆者)

範囲にとり特に Algal Productivity in the Pacific I, II として 8月24, 26日行なわれた分についてプログラムを見ると次の如くである。

前記 I (Review of Recent Development) としては, 8月24日デンマークの NIELSEN 氏が Chairman となり, 西条・市村(日), POMEROY (米), JITTS (豪),



DOTY 教授 (中央, Dean Hall にて)

ALLEN (米), HUMPHREY (米) 氏等により Isotope 及び他の植物プランクトン増殖テクニック等について夫々発表された。前記の II (Review of Major Factors Affecting Productivity and Its Sampling) としては, 8月26日には午前 RYTHER (米) が, Chairman となり, ANDERSON and BANSE (米), THOMAS (米), CASSIE (ニュージーランド), STRICKLAND (カナダ) 氏等の主に植物プランクトンの生理等について研究発表が行なわれた。次いで (Contributed Productivity and Algal Papers として 8月28日午前中に, ABBOTT (米) 女史 Chairman となり, NIELSEN (デンマーク), 元田, 川村(日), WATSON (米), SOONG (台湾), NORRIS (米), LEE (韓国), SEMINA (ソ聯) 氏の主に海藻及びプランクトンの生理, 生態, 分布, 増殖等に関する種々の研究発表, お昼頃からは Contributed Algal and Fungal Papers として WOMERSLEY (豪) 氏 Chairman となり, CHIU (中国), 瀬木(日), ABBOTT (米), 新崎, 徳田(日) 氏等の発表があり, その中 CHIU 女史は *Dermonema frappieri* (MONT. & MILLARD) BOERG. と *Nemalion pulvinatum* GRUNOW の分類学的位置について述べ, 筆者は先年欧州各地で調べた見解をつけ加えて *Enelittosiphonia* について論じ, ABBOTT 女史は Spermatangia が紅藻の主要な分類学上の Indicator であると述べた。新崎氏は *Monostroma* の生活史, 特に或種の Gomontia-type Development について述べた。総計 50 近くの多数の発表があったが, 通覧したところプランクトン関係の発表が多いのに気付いた。この他 8月29日には, Dr. WOMERSLEY による “The *Sarconemia* Group and its relationship” と称するシムポジウム等, 数氏により夫々違った主題によって討論会が行なわれた。

講演会場の別室には、MEÑEZ 氏出品のハワイ産海藻標本、系統樹図及び CHAPMAN 氏 (ニュージーランド) の潜水調査装置 (Prototype underwater growth chamber for large algae) の写真の展示があった。

以上の他会議の期間中には、色々の行事が行なわれた。Science theater として毎日科学映画が上映された他 “Luau” と称する宴会ではハワイ料理を供し、色々の土人のフラ・ダンスを上演した。又日本総領事の Reception も行なわれたが、外国の地でみる菊の御紋はやはり嬉しかった。

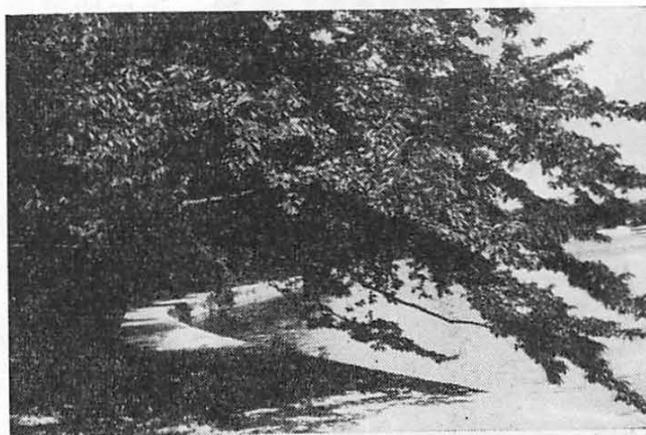
有名な Bishop Museum には中央にハワイ土人の民家が展示され、又別の所にはマッコウクジラ (*Phycetee macrocephalus* LINN., Sperm whale, Pacific ocean 産) の標品が天井から吊り下げてある。このクジラは重量3トンもあるという巨大なもので、片面に内臓がみえる様にしてあるのは興味深かった。

ホノルル滞在中オアフ島を一周した他、小さなローカルの飛行機に乗ってハワイ本島をも訪れた。南国の清潔なこの島を一周し、不気味なキラウエア火山も廻ってその雄大な風光を楽しんだ。然しヒロの海岸には、日本にも押し寄せたチリ地震津波によって被害を受けた家が、今なお残り、当時の激震振りを物語っているようで、胸痛む思いであった。

(2) ハワイからサンフランシスコ経由ワシントンへ。

ホノルルの滞在中も夢の如く過ぎ去って、8月末夜半再び日航機でここを出発しサンフランシスコに向った。機上ふと目を覚ますと折から黎明が訪れ深紅の雲海上を飛び米大陸に近づく。午前10時半10年振りにサンフランシスコに第一歩を印した。翌朝ここを出発しいよいよ UAL で米大陸横断の旅にのぼったが、機中唯一人の日本人であった。隣席の米人夫婦と雑談している中に、僅か数時間後早くもワシントンに到着した。

森の都ワシントンでは Capitol の他多くの巨大な記念建造物を訪れたが、White house のみは思ったより小さかった。



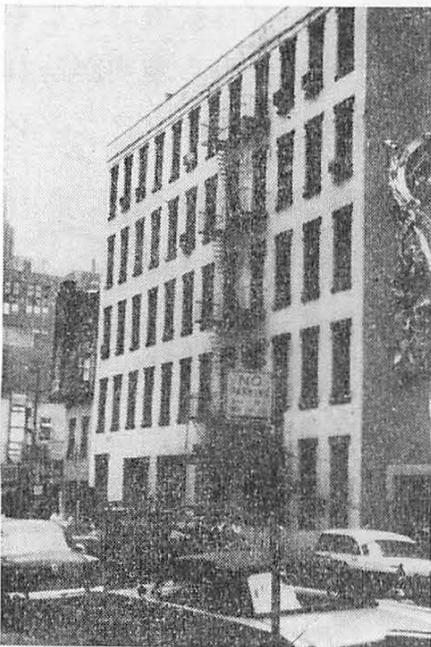
見事な枝振りの桜 (ワシントン・ポトマック河畔にて)

ポトマック河畔で日本から送られた桜をみた時、何より羨しかったのは折られた枝の跡もなく見事な枝振りを示している事であった。この国の高い公德心がうかがわれる。有名な Smithsonian Institution (博物館) は The mall (並樹道) の両側に立並び、北側の Natural history Building には巨大な前世紀の怪物 *Triceratops Prorsus* 及び *Glyptotherium arizonae* (giant armadillo-like mammal) の大骨格が特に注目をひいたが、後者は白色の巨大なカメの如き形をし、長い鋸歯の如き尾が、不気味にのびている。一方南側の Arts and Industries Building にはライトの使用した軽飛行機、日本徳川家の人(細川家・1888年)の使用した駕籠、神風特攻機等が展示されてあった。

滞在中の一日折柄留学中の志平さんの御厚意によってメリーランド大学を訪れた。広大な芝生の中に落付いた褐色のビルが立並び、本当に頭がスツとする。この大学の植物学教室 H. J. PATTERSON hall を訪ねると、折良くクラウス教授も居られ、Phycophysiology, Plant nematology, Pathology の実験室を見学したが、就中精巧なクロレラの実験装置 Sharples super Centrifuge 等に目をみはった。

(3) ワシントンからニューヨークへ

ワシントンから AAL で9月2日更に北進、一時間足らずで待望久しきニューヨークに着いた。空港では折柄留学中の館脇氏に迎えられ、高いビル



ニューヨークの Haskins
Laboratories

の谷間を走りエンパイヤ・ビル(102階)の近くにあるホテルに落付く。同氏留学中の Haskins Laboratories はワシントン・カーネギー研究所の President が経営するもので、国連近くにある五階建のビルで、1, 2階は会社が入り 3, 4, 5階が研究所となっている。内部の設備は充実し、Inverted, Chemist's microscope, 自動日照実験器等が注目をひいた。所長 PROVASOLI 博士は生憎く渡欧中であつたので、館脇氏及び IRMA PINTNER 嬢の案内で見学したが、ここでは海藻の生化学的研究が行なわれ、Requirement substratum の発見等優れた研究が行なわれている。

ニューヨーク水族館で特に注目をひいた

のは Noisy fish, Sargassum fish 及び電気鰻の放電の実験公開等であった。放電実験は大きな水槽に電気鰻を入れ、棒について放電させ、外側の左にオシログラフ、真中にヴォルトメーター、右にランプを置き 500~600 V の放電を実際に表示させている。

上記の他コロンビア大学自然科学博物館、ロックフェラー・センター、Time Square, Coney Isl., Radio City, 国連等多くを廻ったが、天空高く聳える壮麗なエンパイヤ・ステート・ビルからの眺望は噂通り素晴しかった。夕方から夜になると高いビルに一斉に灯がともり、光芒限りなく、水晶宮の如き景観を現出する。

ニューヨークから坦々たるハイウェイをバスで北走すること実に7時間余、果てしなく続く美しい別荘地帯を過ぎて、世界一の臨海実験所のあるウツヅ・ホール (マサチューセット州) に着く。途中自動車を6~8台も乗せて快走する巨大なトラックが珍しく目についた。ここで留学中の安楽・大森氏



ウツヅ・ホール海洋生物学研究所と
テューラー教授

及び GUILLARD 氏, TAYLOR 教授に心から暖かく迎えられた。この臨海実験所は既に創立80年の歴史を持ち、海洋研究所、海洋生物研究所、水族館、水産試験場を綜合したもので、之に更に海軍の海洋研究所、放射能研究所、二つの完備した図書館を持ち、総計27にも及ぶビルから成り立っている。300人の所員、100トンの船4隻、モーターボート数隻で太西洋、地中海に活躍し、完備した設備と相俟って莫大な業蹟を残している。何よりも羨しいのは此等の研究所が仲よく同居し、互に緊密に連絡し合って大きな綜合力を発揮していることであつた。

TAYLOR 教授は夏季大学の講師として滞在中で、ミシガン大学へ帰任する間ぎわに折よく会えて幸であつた。同教授は立派な海洋生物学研究所の一室に居られるが、夏季大学の海藻実験室は木造二階建で、JOHN KINGSBURY 博士 (Cornell University) の案内で同室内を見学したが、Sterilizer, Steamer, Autoclave 等の設備が注目され、又 *Fucus fasciculosus* を検鏡した。ここに

滞在中 Dr. TAYLOR 夫妻の案内で、附近の Falmouth 海岸にて海藻採集を行なったが、待望の *Polysiphonia novae-angliae* TAYLOR を採集出来たのは何より嬉しかった。その他 *Lomentaria*, *Agardhiella*, *Sargassum*, *Cladostephus*, *Sphaerotrichia* 等の日本にない種類をも採集することが出来た。(続く)
(三重県立大学水産学部)

学 会 録 事

会 員 移 動

(昭和36年12月16日より昭和37年3月31日まで)

新 入 会 (1名)

住 所 変 更 (9名)

退 会 (2名)

(昭和36年4月1日より昭和37年3月31日まで)

春立漁業研究会, 瀬嵐哲夫,

寄 贈 文 献

БОТАНИЧЕСКИЙ ЖУРНАЛ, ТОМ XLVI 12,
ТОМ XLVII 1.